

戦場と相撲

—日中戦争期の大相撲と兵士—

Battlefields and Sumo

—Professional Sumo Shows for the Imperial Soldiers during the Sino-Japanese War.—

胎中 千鶴

Chiduru TAINAKA

Keywords : Battlefields, Sumo, the Sino-Japanese War

キーワード : 戦場、相撲、日中戦争

はじめに

大相撲を主催する財団法人日本相撲協会が、昭和期の相撲史の集大成として『近世日本相撲史』（全5巻）を刊行したのは1970年代後半のことである。そのなかで、昭和10年代の大相撲について、協会は以下のように総括している。

この年代ほど国民から愛され親しまれたことは、長い相撲史の中でも他にない。戦争という勝たねばならない時代に、相撲は敢闘精神の訓育のために、国民体育の鍛錬のために、ますます盛んになった。相撲は国技としてスポーツとして、全国民の中に溶け込んでいったのである¹⁾。

戦時期を「大相撲の黄金期」ととらえる日本相撲協会の認識は、戦後も変わっていないことが、この記述からうかがえる。しかし日本社会が大相撲を「国技」ととらえ、熱狂的に支持したこの時期が、「戦争という勝たねばならない時代」にぴったり重なるとするならば、そのときなぜ、どのように大相撲が「愛され親しまれた」かを考える必要があるだろう。それは、現在の大相撲が、「国技」というフィクションのなかに立ち位置を求めることなく、未来のあるべき形を模索するためには避けて通れない作業である。

本稿では、これまで先行研究の少なかった戦時期の大相撲の活動の実態に焦点をあて、なかでも日中戦争期に実施した「皇軍慰問」の実態解明を中心に、関係資料を用いて検討を加える²⁾。その検討を通じて、戦場に赴いた日本兵にとって、大相撲がどのような存在であったかという点を明らかにしたい。慰問団員として大陸の戦地を巡回した力士たちの記録や証言からは、兵

士と相撲の密接な関係性が浮き上がってくるであろうし、そこから武道でもスポーツでもない、相撲の本質的な部分がみえてくる可能性があるからである。

なお、本論で引用する資料は、読みやすさを優先してすべて新字体に改め、句読点を補った。

1. 大陸巡業の変容

(1) 大陸巡業の本格化

明治政府の進める近代化政策のもと、前近代的な「野蛮の遺風」³⁾として批判された大相撲興行は、1880年代にはその存続すら危ぶまれる状況となった。

しかし1894年(明治27)の日清戦争、1904年(明治37)の日露戦争の「勝利」によって日本社会がナショナリズム高揚期を迎えると、実力派力士の登場とあいまって、にわかに相撲ブームが訪れた。日本社会に大相撲を日本固有の技芸、すなわち「国技」と認識する機運が高まるなかで、相撲興行組織の東京大角力協会が、東京両国に常設の屋内相撲興行場を設立して「国技館」と命名したのは、1909年(明治42)のことである⁴⁾。

大相撲の大陸巡業もまた、当時の日本のアジアへの勢力伸長に軌を一にするように、この時期から本格化する。関係資料からは、それ以前の1890年代末から、香港や韓国、日本の植民地となった台湾などで巡業を実施した小規模な興行団体の存在が確認されるが⁵⁾、本格的な大陸巡業といえるのは、1910年(明治43)6月に実施した「韓国・満洲巡業」である。これは当時東京・大阪・京都の3カ所に分散していた相撲興行団体のなかで最大規模の「東京相撲」が主催したものだった。

同年8月の韓国併合直前におこなわれたこの巡業は、第2代韓国統監で病気療養中だった曾瀬荒助が、かねてより最良にしていた東京相撲の責任者を招き、「東京力士を韓国に巡業せしめ、同国に尚武の気風を示しては如何」と勧めたことで実現したという⁶⁾。

一行は常陸山、梅ヶ谷横綱をはじめとする計186名で、6月17日に東京を出発し、同月24日に韓国皇帝の上覧相撲を実施、翌25日に初日を迎えた。その後は京城のほか、釜山、平壤の興行を経て、大連から帰国の途につく予定だった。

しかし、常陸山の発案で急遽変更し、7月22日に旅順の白玉山にある日露戦争戦没者忠魂碑前で慰霊相撲をおこなった。長旅に疲れた力士たちにとっては「予定にない追悼相撲などには誰も関心を持たぬ有様」⁷⁾だったが、横綱常陸山が「金儲けの為めの興行ではなく、初めて渡満した我々が、お国の為めに異境の土と化した忠勇なる将士の霊を弔慰せずには帰るとするのは、日本人として忘恩の行為である」と強く主張し、実施に至ったという⁸⁾。

とはいえこの巡業の主目的が、異民族に尚武の気風を示したり、相撲で戦没者を慰霊したりすることではなく、内実は商業的な興行だったのは明らかである。この巡業について東京相撲の取締(最高責任者)の友綱は、「韓国でも満洲でも邦人の生活程度は一般に内地より高いと

見え、纏頭（祝儀のこと。引用者注）なども多く、協会宛のだけでも三千余円、緞子、縮緬の幟二十余旒に達し」と述べている⁹⁾。一行が韓国各地の日本人コミュニティを巡り、在留邦人に大いに歓迎され、少なからず収益を上げたことが見てとれよう。東京相撲にとってみれば、韓国併合後の植民地朝鮮の「発展」を見据え、新たな興行先の新規開拓につながるという点でも、意味のある巡業だったと考えられる。

しかし、その後大正期を迎えると、第一次世界大戦開戦や不景気などの諸要因から、大相撲の人气が下降し、大陸巡業は激減した。加えて1923年（大正12）に関東大震災によって国技館が焼失したことも、協会にとって大きな痛手となった。

そうした危機的状況から脱却すべく、1925年（大正14）、関係者は財団法人大日本相撲協会（以下、協会と略）設立を文部省に申請し、認可された。協会設立にあたっては、頭山満、杉山茂丸などの国家主義者が政府や官中に積極的に働きかけ、奏功したことが知られている。

さらに2年後、当時陸軍に所属していた賀陽宮恒憲王の推挙により、陸軍大将福田雅太郎が協会の初代会長に就任した¹⁰⁾。こうして大相撲は、国家と軍部を後ろ盾とし、「日本固有ノ国技タル相撲道ノ維持興隆」という大義を掲げる公益法人として、再出発をはかることになったのである¹¹⁾。

1920年代後半期は、協会が新体制に移行する過渡期であり、慢性不況のあおりも受けて、大相撲の海外巡業は不活発であった¹²⁾。さらに20年代末に日本を直撃した世界恐慌と、それに続く昭和恐慌で1930年代初頭の日本社会は疲弊の度を増したため、娯楽興行団体としての協会は、資金繰りや力士たちの待遇改善要求などで混乱・紛糾が続いた。

大相撲の大陸巡業が規模・内容ともに本格化し、協会の恒例行事となるのは、1930年代前半のことである¹³⁾。それはまさに、軍部主導の国家改造を企図する関東軍参謀らによって引き起こされた1931年（昭和6）の柳条湖事件（満洲事変）と、1933年（昭和8）の満洲国建国期に重なる。

その後も大相撲は、植民地朝鮮から満洲の各地域を巡る大陸巡業（いわゆる「満鮮（鮮満）巡業」）を、1943年（昭和18）まで毎年欠かさず実施した。また同時に、中国における日本軍の駐屯地や占領地に赴き、軍関係者を対象とした相撲巡業、すなわち「皇軍慰問」をさかんにおこなうようになった。

（2）1937年の「満鮮巡業」

1930年代半ば、満洲事変後の景気回復と人気力士の登場で、大相撲界は一気に活況を呈した。33年に横綱になった玉錦を筆頭に、武蔵山、男女ノ川など有力力士が活躍、さらに1936年（昭和11）からは関脇双葉山（38年に横綱）が連勝を続け、39年までに69連勝の大記録を達成したからである。日本社会の相撲ブームは沸騰し、新聞や雑誌はさかんに相撲特集を組んだ。東京日日新聞記者で相撲評論家の相馬基によれば、「表紙を双葉山か玉錦で飾れば、売行きは羽の生えたようだった」という¹⁴⁾。

とりわけ前へ出る攻めの相撲に徹する双葉山は、その真摯で誠実な挙措や人柄とあいまって人々を魅了した。相馬はまた、1937年（昭和12）の日中戦争勃発後の双葉山人気について、「日本軍の破竹の進撃を双葉山の常勝ぶりになぞらえて、随喜した世評は、彼を国技館の英雄から、日本の守護神のように祭りあげた」¹⁵⁾とも述べている。

では、この時期の大相撲の大陸巡業はどのようにおこなわれたのだろうか。一例として、日中戦争勃発期にあたる1937年の満鮮巡業の記録を概観してみよう。

この年の巡業は、横綱玉錦、双葉山をはじめとする力士と年寄・行司・呼出・世話人など総勢350人余にのぼる大規模なものであった。盧溝橋事件当日の7月7日に門司港を出発、11日からの大連5日間を皮切りに、奉天4日、新京4日の計3カ所を、国内の本場所13日間と同様の形式で興行し、軍関係者のほか一般客も観覧して大盛況となった。その後一行は二手に分かれ、玉錦・双葉山一行250人余は朝鮮巡業へ、残る100余名は満洲奥地への「皇軍慰問」に向かった。朝鮮巡業は8月17日に、皇軍慰問班は8月18日に帰国した¹⁶⁾。

37年の巡業が従来の満鮮巡業と大きく異なる点として、まず勧進元（主催者）の顔ぶれの変化が挙げられる。通常、相撲巡業先には、協会から「世話人」「目代」などとして推薦された好角家があり、彼らが先乗りしてきた協会関係者と接触して、勧進元を選定するのが一般的だった。勧進元の多くは、地域社会の有力者で、外地の日本人コミュニティにおいては、土建業、飲食業、旅館業、花柳界などで成功した商工業者が多い。「満鮮巡業」の場合も、36年までは同様であった。しかし37年の巡業では時勢の変化によるものなのか、朝鮮では朝鮮総督府法務局管轄の財団法人治刑協会が、大連では関東軍・関東局・大連市役所などの行政機関が主催者となった。

また、巡業中の相撲内容も一変した。一般に大相撲の地方巡業は、「初っ切り」（相撲の禁じ手などを滑稽に見せるもの）や「お好み相撲」（観客の要望に応じて対戦相手を決めたりすること）など、演芸色の濃いプログラムを中心とした、いわば「花相撲」をおこなうことが多い。しかしこの年の巡業では、「東京の本場所と同じような形式で挙行」したため、上記のような演目はなく、観客は「さながら東京の本場所を観るような気分」¹⁷⁾だったという。

実のところ演芸色を一掃すると、「素人筋には聊か物足りない感じを与え」¹⁸⁾るようで、巡業らしい華やかさや賑わいには欠ける内容となる。しかし戦時下の外地で、国家機関の全面的な協力を得ておこなうものである以上、「国技」にふさわしい真剣勝負を見せる必要があったのだろう。満洲場所では軍部と警察の後援ということもあり、入場券は前売りで完売し、収益のなかから関東軍、関東局、海軍司令部に献金をするなど、成功裏に終わった¹⁹⁾。

こうして国内外で黄金期を迎えた大相撲だったが、協会にとっては新たな課題も生まれた。力士の活躍が注目されればされるほど、「国技タル相撲道ノ維持興隆」という大義に即した活動も、社会から要請されるようになったのである。

折しも36年には、文部省が「学校体操教授要目」を改正し、これまで課外運動とされていた相撲を、小学校の体育教材のひとつとして正課に採用した。教育現場では、小学校体育の教

材としてふさわしい、科学的に体系化された相撲理論と、それを実践できる指導者を求める動きが出ていたが、公益法人でありながら内実は興行団体である大日本相撲協会には、それに応えるような体制も人材もなかった²⁰⁾。

結局協会は、高揚する戦時ナショナリズムの熱気に便乗しながら、これまでと同様の興行形式を維持しつつ、そのなかで国技の普及団体としての存在感を、なんらかの形で示すほかなかったといえよう。

そうした状況下で協会は、36年頃から、朝鮮・満洲巡業の日程上に「皇軍慰問」を加え、この活動を重視するようになる。次章では、この皇軍慰問の実施状況について詳述する。

2. 力士たちと戦場

(1) 大相撲の皇軍慰問とは

「皇軍慰問」とは、戦時期の日本社会で広くおこなわれた日本軍の駐屯地や占領地への民間人の慰問活動のことである。日中戦争勃発後は、地方自治体や議員、教育関係者、婦人団体、芸能団体など多種多様な慰問団体が結成され、満洲のほか「北支」(華北)「中支」(華中)「南支」(華南)に赴いた。

慰問内容は訪問団の性質によってさまざまである。駐留部隊を訪問し、同郷の兵士に故郷の様子を伝えたり、家族から託された手紙を渡したりする場合もあれば²¹⁾、歌舞伎、演芸、芸妓などの芸能団体は、現地で公演を開催しながら駐屯地を巡回することもあった²²⁾。

兵庫県教育会の皇軍慰問に関する宋安寧の論考によると、軍部は1938年(昭和13)にこれらの民間の慰問団に対して、現地での慰問団への対応が軍務に支障をきたすという理由で渡航制限を加えたという。そのため多くの府県の教育組織が出した訪問申請には、これ以降なかなか許可が下りなくなってしまった²³⁾。

確かに当時の皇軍慰問の資料には、慰問先の兵站部司令官らが一行を接遇したり、名所旧跡や戦跡を案内したりするなどの記録が散見される²⁴⁾。各団体が持参する慰問袋や現地での慰問活動は兵士たちの慰安にはなるものの、民間人の駐屯地への出入りは現場の人員に負担がかかり、神経を尖らさざるを得ないものだったのだろう。

そうした状況にもかかわらず、上述のように大相撲の皇軍慰問は、37年の満鮮巡業から本格化し、その後、1943年(昭和18)まで、毎年実施された。

しかも大相撲の皇軍慰問は、他の慰問団にくらべると、参加者の多さと活動期間の長さにおいて群を抜いている。慰問団は、通常、五月場所終了後の夏場に派遣されることが多く、満鮮巡業終了後に引き続き皇軍慰問をおこなう日程の場合は、3ヶ月以上の長旅を強いられることもあった。国内の地方巡業は1ヶ月半程度の旅だから、彼らにとっても初めての長旅である。

また1938年からは、これまで部屋別など中規模の陣営で開催していた満洲興行を、「満洲場所」として国内の本場所同様に扱うようにしたため、力士は全員参加せざるを得ず、数百人規

模の団体にふくれあがった年もあった。慰問の際は班に分かれて活動したとはいえ、戦時下の中国で、これほど長期間にわたり大規模な興行団体が各地を移動した例は他にあまりないだろう。

それではなぜ大相撲だけが、こうした慰問が可能だったのだろうか。まず考えられる理由は、この慰問が軍部・警察側から要請されたものであるということである。1938年の初の「北支皇軍慰問」実施に至った経緯について、当時の協会取締（理事長）の藤島秀光は次のように述べている。

わが大日本相撲協会では、征野千里大陸に転戦する皇軍将士を、なんとかして慰問してあげたいとおもっている矢先、陸軍恤兵部からの御希望で、中支那慰問の交渉を受けた。時宛も南京陥落して日も浅い折柄とて、願ったり叶ったりのことであった²⁵⁾。

「願ったり叶ったり」とは述べているものの、恤兵部からの具体的な要望を受けての実施だったことがわかる。また1940年以降の満洲場所開催については、元力士で、当時満洲国で相撲の普及活動をおこなっていた和久田三郎が以下のように回想している。

三回目の満洲場所を迎えるという。私は関東軍の中島少佐に前回の実情を告げ、国技の精神を満洲場所に発揚せしめるには、これではならぬと相談した。関東軍は相撲協会に注意するところがあり、協会側も率直に理解し、これまでの営利第一主義を投げすてて、満洲場所にふさわしい方針をとることになった²⁶⁾。

既述のように、双葉山ブーム沸騰以降の大相撲は満洲巡業も盛況で、協会の大きな収入源となっていた。しかし満洲国で興行色を排した「角道」（相撲道）振興をめざしていた和久田は、外地においても旧態依然の巡業を展開する協会の方向性に対して批判的だった。そのため彼は、満洲場所自体からも「営利第一主義」を排除し、兵士を優先的に招待するほか、純益を満洲駐留軍への恤兵費や慰問費に献納したり、新京の相撲振興費にあてたりするよう協会に提案したという。つまり満洲場所も皇軍慰問化していくという意向である。すると協会の一部が意外な反応を示した。和久田は次のように述べている。

場所前になって、急に立浪一門が参加せぬということである。労多く利の尠い満洲場所を捨てようとしたのだ。私たちは、その心事の卑しさにあきれ、中島少佐等と協議の上、「今後満洲における職業力士の後援は一切とりやめる」と申しおくれた。これには協会側も驚いたとみえて、やがて全員揃って渡満することになった²⁷⁾。

この記述からは、利益が見込めない大陸巡業には主体的にかかわろうとしなかった協会の姿

勢がうかがえる。ましてや物心両面での「国民奉公」を前提とする皇軍慰問の実施に対して、積極的な態度を協会が示すとは考えにくい。しかし成立経緯から軍関係者と密接な関係を持ち続けている協会にとって、軍部の要請を拒むことはできようはずもなかった。

(2) 皇軍慰問の実施状況

それでは30年代から40年代にかけて実施された大相撲の皇軍慰問とは、具体的にどのようなものだったのだろうか。

表1は、日中戦争が勃発した1937年（昭和12）から、43年（昭和18）までの、中国大陸における大相撲の皇軍慰問の実施状況である。これをみると、慰問する地域が戦況の推移とともに変化・拡大しているのがみてとれる。

日中戦争勃発時には満鉄（南満洲鉄道）の浜洲線、浜綏線など、満洲国北東部の幹線鉄道周辺地域を訪れていた慰問団だったが、37年8月の第二次上海事変と、同年12月の日本軍による南京占領によって華中に占領地が拡大するや、翌38年には協会初の「中支皇軍慰問」を実施するに至っている。

また、38年の張鼓峰事件や翌39年の東安鎮事件、ノモンハン事件など、満ソ国境での武力衝突が多発し国境警備が強化された影響か、40年の満洲国内の慰問先は嫩江、黒河などの黒竜江に近い拠点のほか、綏芬河、東寧、東安、虎林などの東部国境地域にまで足を伸ばしていることがわかる。

華中・華南地域では、汪精衛が南京に国民政府を樹立した40年以降、大規模な「中支慰問」と、初の「広東慰問」が可能となった。また、日本軍が中国の抗日根拠地やゲリラ地区の殲滅をはかるべく華北地方で展開していた掃討作戦に合わせるように、43年には山西省の日本軍占領地でも長期間の慰問活動を実施している。まさに協会取締の藤島秀光がいうように、「かつてない大規模な組織」で、「慰問の範囲も比較にならないほど拡大され」²⁸⁾ いったのである。

こうした慰問活動は、戦時期の協会の「報国」的な諸活動のなかで、おそらく世間から最も注目され、評価されたものだったのであろう。時に協会に対して批判的な記事を掲載していた雑誌『相撲と野球』の誌上においてさえ、43年には以下のような意見がみられるようになった。

満洲、支那大陸に巡業する力士諸君の真摯なる態度や、献身的な奉公は、(中略)過去の興行第一主義の巡業を脱して、相撲の娯楽面を極度に利用して、皇軍将兵の慰問のために鮮な転向振りを示している²⁹⁾。

もはや皇軍慰問は、国技普及団体としての協会が、その役割を演じるために欠かせない場となっていることがうかがえる。軍部による慰問の要請に応え続けることが、協会が地位を維持するための道でもあった。

(表1)

実施年月日	慰問地
1937年(昭和12) 7月27日～8月18日	・満洲巡業後、朝鮮巡業から一部分離し慰問へ ハイラル→満洲里→チチハル→一面坡→牡丹江→勃利→林口→図們 →清津から敦賀へ帰国
1938年(昭和13) ① 4月16日～5月4日 ② 8月11日～8月26日 ③ 8月10日～8月24日 ④ 8月13日～9月5日	・①は慰問のみ。②③④は満鮮巡業終了後に3班に分かれて実施 ① 南京→無錫→蘇州→杭州→上海から神戸 ② 阿城→チャムス→牡丹江→大連から神戸 ③ 北安鎮→孫呉→ハルビン→大連から神戸 ④ ハイラル→チチハル→公主嶺→山海関→大同→張家口→北京→ 天津から帰国
1939年(昭和14) 7月25日～8月8日	・満洲巡業後、一部が帰国せず慰問と朝鮮巡業へ 青島→済南→北京→天津→阜新・錦縣・安東→朝鮮巡業へ(9月7 日帰国)
1940年(昭和15) ① 8月7日～8月28日 ② 8月7日～9月 ③ 8月7日～9月 ④ 9月27日～10月27日 ⑤ 9月27日～10月27日	・「満洲場所」後、「北支」(①)と「北滿」(②③)の2班に分かれ て慰問へ。④⑤は慰問のみ。2班構成。④はさらに3組構成。 ① 北京→大同→張家口→済南→青島→天津→安東→朝鮮巡業へ(9 月7日以降帰国) ② ハイラル→満洲里→昂々溪→チチハル→嫩江→北安→孫呉→黒河 →(地名不明)→帰国 ③ 牡丹江→綏陽→綏芬河→東寧→東安→虎林→佳木斯→帰国 ④ a. 上海→漢口→武昌→応城→応山→漢口→九江→南京 b. 上海→漢口→武昌→咸寧→蒲圻→漢口→南京 c. 上海→漢口→九江→安義→南昌→九江→南京 ⑤ 上海→杭州→南京→蚌埠→安慶で④と合流し上海から帰国
1941年(昭和16) 3月21日～4月20日	・この年の慰問は「南支」のみ実施 台湾→広東→台湾から内地へ帰国
1942年(昭和17) ① 7月26日～8月11日 ② 7月26日～9月3日 ③ 11月19日～12月1日	・「満洲場所」後、「北支」(①)と「北滿」(②)の2班で実施。③は 慰問のみ ① 北京→青島→済南→天津→帰国 ② 瓦房店→営口→遼陽→本溪湖→阜新→錦縣→通化→西安(遼源) →四平街→ハイラル→チチハル→孫呉→チャムス→東安→牡丹江 →延安→琿春→朝鮮巡業へ(9月下旬帰国) ③ 上海→蘇州→南京→帰国
1943年(昭和18) ① 8月11日～9月28日 ② 8月10日～9月24日以降 ③ 7月28日～9月24日以降	・「満洲場所」「大連大相撲」「華北場所」終了後、2班(①②)に 分かれ実施。①はさらに2組構成。また大連興行のあと一部分離し て③となる。 ① a. 牡丹江→東寧→綏陽→鶏寧→虎林→東安→林口→チャムス →黒河→孫呉→北安→チチハル→ハイラル→西安→四平→通化 →吉林→間島→琿春→帰国 b. 鄭家屯→白城子→阿爾山→昂々溪→士爾池哈→札蘭屯→免渡 河→瑯琿→神武屯→双城堡→阿城→一面坡→勃利→滴道→林口 →牡丹江→蘭崗→寧安→敦化→春化→琿春→帰国 ② 張家口→太原→石門→済南→青島→承德→北票→錦縣→公主嶺→ 鉄嶺→営口→海城→遼陽→撫順→奉天→本溪湖→平壤→帰国 ③ 包頭→厚和→平地泉→大同→運城→臨分→分陽→路安→太原→榆 次→陽泉→保定→錦縣で②と合流→以下②と同じ

(財団法人日本相撲協会博物館運営委員監修『近世日本相撲史』第2巻、『相撲』第2巻～第5巻、および後藤康行「戦時下の相撲と戦地への「皇軍慰問」」『専修史学』55号、2013年、を参考に作成。満鮮巡業の延長として実施された慰問に関しては、資料上で「皇軍慰問」とされている活動のみを巡業と切り離して掲載した。)

(3) 力士たちのみた戦場

さて、実際に慰問団に参加した力士たちは、「皇軍慰問」をどのようにおこない、何を見て何を思ったのだろうか。

既述のように一行の慰問先は、満洲国内では満鉄沿いの大都市・中都市のほか、開拓移民村や軍の駐屯地がある満ソ国境にも及んだ。また華中・華北の占領地域では、北支那方面軍の前線地区まで訪れている。ここでは当時の相撲雑誌の記事などから、その実態をみてみよう。

まず彼らの移動手段は、満洲国内の場合、満鉄での移動が基本である。37年7月の慰問では、関東軍司令部が発行した証明書を示すことで交通費が無料とされた。駅から駐屯地や宿舍までは、軍のトラックで送迎されることもあった³⁰⁾。また証明書には、「交通宿泊二関シテハ総テ自弁トスルモ他ニ方法ナキ時ニ限り応分ノ便宜ヲ受クルコトヲ得」という一文も添えられていた³¹⁾。

一行は、都市部では一般の旅館、駐屯地では兵舎や学校などに分宿することが多かった。食事は内地の巡業と同様に、付け人たちがちゃんこを作ったが、飲食店などで在留日本人に接待される場合もあった。一行の記録をみると、満洲国内の都市部周辺では、軍や警察のほか、日本人後援者の手厚い支援などもあり、移動・宿泊・食事全般にわたり比較的快適な旅であったことがうかがえる。

しかし、国境付近への慰問記録からは、一転して緊迫した空気が垣間見える。1940年（昭和15）の北満方面に向かった一行は、新京を出発後、西部国境沿いの満洲里からハイラル、チチハルを経て寧霍線や北黒線付近で慰問を終えると、黒竜江沿いの国境地帯に位置する黒河の市街に到着した。当時関東軍は、満洲国を基地として対ソ戦を計画・準備しており、国境地帯でのソ連軍への挑発も辞さないという方針を固めていた。力士たちが訪問した黒河の要塞は、毒ガス兵器が配備されていたともいわれる場所である³²⁾。

ここは黒竜江をはさんで、ソ連領のトーチカや鉄条網がみえるばかりでなく、ソ連兵舎からレコードの音楽がかすかに聞こえるほどの近さにある。力士たちは「満洲里の国境とは異なった、緊張した国境の気分を体験した」³³⁾のだった。

一行はここで急遽、黒河からバスで一時間半ほどの場所に駐留する前線部隊から慰問を「懇望」され、出向いている。記録には地名は伏せ字になっているが、「他の部隊の将校でさえも、関東軍司令部の許可書がなくては入れぬという嚴重さ」で、「慰問などは勿論、電気さえなく、御苦労に対しては思わず頭がさがった」という³⁴⁾。

こうした戦時体制下で慰問をおこなう力士たちは、当然のことながら大きな精神的・身体的負担を抱えることになった。内地とは異なる気候や食生活、長時間の移動などで体調を崩し、赤痢やコレラに罹患する者も出た。たとえば横綱双葉山は、1938年（昭和13）の「北支慰問」時に現地でアメーバ赤痢にかかった。相撲を取れる状態ではないため、張家口や大同で何とか土俵入りだけを務めたが、各部隊を巡回するたびに土俵入りを求められるので、やむなく1日5～6回もおこなったという。これは彼にとって「後にも先にも経験したことのない苦しい巡

業」³⁵⁾だった。双葉山と同様に、過酷な皇軍慰問で体力を消耗し、帰国後の本場所で成績不振に陥る力士も多かったようだ。

戦局が悪化する華北・華中方面への慰問は、さらに生命の危険をとまなう。昭和30年代に関脇出羽錦として活躍した年寄田子ノ浦が戦後出版した著書によれば、1940年（昭和15）の「中支慰問」の際、多くの参加予定者が出発前に参加を拒んだという。先発した行司が乗った客船が撃沈されたことを知った者たちが、「われわれは兵隊でも軍属でもなく、慰問団なのだから、そんな危ない所へは行かんでもいい」と言い出したのだ。結局「軍の慰問だから、行かなくてはならぬ」という上層部の意見に従い、「いやいやながら全員慰問に参加することになった」のだが、それでも直前になって呼出しなど3、4人が逃げ出したという³⁶⁾。

こうして否応なく戦場に赴かざるを得なくなった力士たちだったが、彼らが現地で一様に驚いたのが、自分たちを熱狂的に歓迎する兵士たちの様子である。

兵士が力士を待ちわびる背景には、用具を必要とせず、狭い場所でもすぐにおこなえる相撲が、最も手軽な「戦場の娯楽」として彼らに親しまれていたという状況があった。また部隊の上官たちにとっても、戦闘の合間におこなう相撲大会は、緊張感を高め、身体の鍛錬にもつながるという大義名分によって、安心して推奨できる娯楽だった。元『中央公論』編集長で、陸軍主計中尉として華中に駐留した佐藤観次郎によれば、どの部隊でも、駐留地には兵士たちによって本格的な土俵が作られ、必ず相撲がおこなわれたという³⁷⁾。

1943年（昭和18）に満ソ国境地帯の慰問に参加した大関前田山は、雑誌の座談会でこう述べている。

それと、感激することは、汽車に乗っていると、その沿線の兵舎内でよく兵隊さんが相撲をとってられるのを見受ける。私らが汽車の窓から体をのり出して声をかけると、向こうでは相撲をとるのをやめて、汽車の見えなくなるまで盛んに手を振っている。なんとも言えない、胸の熱くなる気持ちです³⁸⁾。

過酷な環境にある兵士たちにとって、ラジオやニュース映画でなじみのある上位力士たちの来訪は、さぞや胸躍るイベントであったに違いない。前線地区や国境地帯など、他の慰問団もめったに訪れない場所の場合はなおさらである。田子の浦は、満ソ国境地帯での次のような光景を目にしている。

それでも、奥地慰問は張合いがあった。見物にくる兵隊さんも宿泊地のものばかりではない。十里も十五里も先から集まってきてくれる。前の晩か、よほど朝早く隊を離れてくるのだろう。関取衆が相撲をとるところには、木陰でスヤスヤ眠っているのをみかけた³⁹⁾。

こうした駐屯地で一行が兵士に披露するのは、満洲場所のような真剣勝負ではなく、飛付き

(仕切りなしで対戦すること)、初っ切りなど余興を多く取り入れた花相撲である。また、どの慰問先でも人気があったのは観客が「飛び入り」をする時間で、兵士たちはかわるがわる力士たちの胸を借りて力試しを楽しんだ。一度に40人ほどの兵士が「飛び入り」に参加したこともあったという⁴⁰⁾。幼少時から相撲に親しんできた者が多いだけに、戦場で彼らが熱狂するのは、「見る相撲」ではなく、自らが大きな相手と実際に「取る相撲」だったのである。

つまるところ前線の兵士たちは、武士道を体現するような「国技相撲」の観戦など求めてはいなかった。皮肉なことに内地では「見せ物に墮してしまつたと云われる国技館の相撲」と揶揄され、「大東亜の新しき相撲道」⁴¹⁾を慰問活動によって示すよう求められていたはずの大相撲は、その豊かな花相撲的要素をもつがゆえに、戦地でこれほど兵士に愛されたのである。

しかし戦線の拡大とともに、大相撲の皇軍慰問にも限界が訪れた。次章では、日本の南進政策とともに南方に向かう大相撲の皇軍慰問をみてみよう。

3. 南方戦線の大相撲

日本は1940年（昭和15）に汪精衛政権を樹立させ、その後も重慶の蒋介石国民政府攻略にあらゆる手を尽くしたが、成功に至らなかった。膠着する日中戦争の打開策をもたないまま、「南進」に新たな好機を見いだそうとした日本軍が北部仏印へ武力進駐を開始したのは、同年9月のことである。

当時華南戦線と南進作戦を展開していた南支那方面軍の拠点、広東省広州にあった。ここに大相撲の慰問団が訪れたのは、1941年（昭和16）4月である。この慰問については、当時の協会機関誌『相撲』や、1970年代に刊行された日本相撲協会監修『近世日本相撲史』ではほとんど言及されていないが、『朝日新聞』台湾版の紙面には、「皇軍慰問の大相撲 笠置山関一行遙々広東へ」という見出しで以下のような記事が掲載されている。

南支でははじめての国技相撲で南支皇軍を慰問しようと、陸軍省恤兵部から派遣された笠置山関一行七十五名は、さる三月二十一日来広、旅の疲れを休めるいとまもなく、二十二日午前九時から、広東中山記念堂内に造られた土俵で早速熱戦を演じ、ぎっしり詰った見物の勇士達は、久しぶりに見る相撲の妙技に暑さも忘れ歓声をあげてみいった。（中略）なお同慰問団は、約一ヶ月の予定で広東近接区で慰問する予定⁴²⁾。

これは出羽海部屋の年寄出来山を団長とし、笠置山、盤石、鹿島洋など幕内力士を中心に構成された慰問団で、4月19日には慰問を終え、台湾の基隆港に帰着した。この「南支慰問」について、出来山は次のように述べている。

私達は今までに中北支、北満国境にまで慰問したことがあるが、こんどほど第一線の緊

張した感激を覚えたことはなかった、(中略) 兵隊さん達は私ら一行の来るのをどれほど待ちこがれていたかを聞いた時は、どんなことがあっても、それこそ命がけでやらなければならぬと決心をさせられた。

驚いたことは、南支における相撲熱の旺んなことで、部隊のどこに行っても必ず土俵が造られていて、その練習振りを見ても規律正しく私達も顔負けしたほどである⁴³⁾。

しかし慰問団にとっては、本場所の合間の1ヶ月間を、亜熱帯気候の外地で過ごすのはきわめて苛酷な業務であった。その結果、参加力士たちは「大抵の者は二三貫匁位は体重を減らし」しまい、帰国後も「腹がペチャンコになったり、足腰がフラフラして稽古場へ下りても二日三日は稽古らしい稽古も出来なかった」⁴⁴⁾ という有様だった。

とりわけ番付上位の力士が帰国後の本場所で不振となるのには、理由があった。既述のように「慰問相撲と云えば」、力士が「兵隊サンを相手に稽古をつけるのが、慰問土俵に於ける主なる事」であることは南支慰問でも同様だった。「兵隊サンは夫れを非常に喜ぶのであって、(中略) それがあの人達にとっての何よりの楽しみ」だからである。そのため「幾ら有望でも、三段目以下の名もない人では適しもせず、望まれもしないので、相手はいつも幕内の人達ばかり」⁴⁵⁾ ということになる。

結局上位力士は、兵士たちの求めに応じて四六時中「飛び入り」の相手をせねばならず、疲労と稽古不足で体調を崩していった。このとき慰問団に参加した小結笠置山も、帰国後の夏場所まで負け越している。しかし、協会随一のインテリ力士であり、協会の「報国」的な慰問活動を重視していた彼は、2年後の1943年(昭和18)春場所の頃、今後の南支慰問について次のように述べたという。

兵隊さんの征くところ、私たちはどこまでも慰問相撲に行きたいですよ。兵隊さんがどんなに喜んでくれるかと言うこともよく判っています。行ける時期が来たら——ただそれだけです。その時はまず人数は三十人位にして、締込みなどの必要なもの以外は荷物もできるだけ簡単にしたい。マニラ、ジャワ、昭南……と大体二ヶ月あれば……⁴⁶⁾。

だが笠置山の意向はかなわず、資料上でみる限り、南方への慰問は41年のこの1回限りとなった。これまで日本軍の戦線拡大路線に何とか沿ってきた協会だが、南支慰問は人員確保や費用の面で負担が重すぎたのだろう。南支慰問どころか協会の皇軍慰問の継続自体が、戦況の悪化とともに限界に近づいていた。結局1943年(昭和19)夏を最後に、協会の外地における皇軍慰問は終了した。

最後に、協会が慰問に行かなかった南方戦線の占領地における大相撲について、少しだけふれておこう。朝日新聞記者の斎藤良輔は、1942年(昭和17)に海軍報道班員として蘭印方面作戦に従軍した際、興味深い記録を残している。斎藤は、スラバヤ軍港入場、ニューギニア、

ティモール、モルッカ群島の攻略などを取材したが、あるとき南方戦線の兵士たちが大相撲のラジオ中継⁴⁷⁾を聴く光景を目にした。

時期は陸海軍がニューギニア東部に上陸後の、ポートモレスビー攻略直前のころであろう。モルッカ諸島アンボンのヴィクトリア要塞に駐留していた海軍特別陸戦隊は、オランダ軍が放置していった「短波式の豪華なラジオ」を手に入れた。折しも内地では1942年夏場所が開催されている。激しく雑音が入るラジオのダイヤルを調整しながら、「ラジオの前に耳を押しつけ押しつけて、大鉄傘下の力闘を思い描」⁴⁸⁾いている兵士たちを見て、齊藤は次のように描写している。

それは母の声を恋うる幼児のように、「祖国の声」は勇士たちの胸へ海綿のように吸収されていった。しみじみと味わうように眼を閉じている兵曹。生々と眼を光らせている者もあった。しかも誰もが一言も口に出さない一瞬であった。

「ああ、内地じゃア、こうして立派に相撲をやっているんだなア！」

誰やらがポツンと熱のこもった口調で、しっかり云った⁴⁹⁾。

日本から遠く離れた戦地で苛酷な日々を送る彼らにとって、内地で本場所がいつものように賑々しく開催されている事実を音声で確かめることは、「母の声」、つまり「母国」が健在であることを実感する経験だったのだろう。斎藤の記録のみならず、戦時期の雑誌には、「敵国に抑留されている同胞が、祖国では戦争の真最中に大相撲が行われているという国内の余裕綽々たる状態を偲び、非常に安心している」⁵⁰⁾という声も紹介されている。

実は大相撲は、1945年（昭和20）の敗戦直前の6月にも、焼け残った国技館の一角で、客を入れずに本場所を開催している。第二十八代木村庄之助の証言によると、これは軍部に通常開催を要請されたもので、軍部は「中国や南方向けに、『相撲をやっている』という放送をしたかった」⁵¹⁾からだという。たとえ観客がいない静かな本場所であろうとも、せめて大相撲が「ある」ことを伝えれば、民心の安定につながると軍部は考えたとみられる。

おわりに

本稿では、日中戦争期の大相撲が、大陸巡業や「皇軍慰問」を通して、どのように戦場や兵士とかかわったのかという点について、関係資料に基づいて検討を加えた。

ここで明らかとなったのは、軍部の要請を受けた大日本相撲協会が、戦時期全般にわたり大規模な皇軍慰問をおこなっていたことである。その活動の背景に、戦時ナショナリズムの高揚とともに巻き起こった日本社会の相撲熱があるのはいうまでもないが、一方で、「相撲道としての国技の普及」という大義名分に沿う活躍を求められていた協会にとって、皇軍慰問は報国的役割を世間に示すための数少ない機会でもあった。結果的に慰問団の訪問先は、満洲国国境

から華北、華中へと広がり、最終的には華南地方にまで及ぶこととなった。

しかし実際の慰問活動のみてみると、前線兵士たちが心待ちにしていたのは、真剣勝負の国技相撲の観戦ではなく、自らが参加できるような娯楽としての相撲だった。非日常的な限界状況に置かれた兵士たちは、たとえひとときでも、その規律化された兵士としての身体と精神を、花相撲によって解放したかったのかもしれない。

一方慰問団も、皇軍慰問の内実が従来の地方巡業と同様である点について、一部の関係者を除きほとんどの者が何ら疑問を持たなかったようにみえる。もしそうであるなら、土俵を戦場になぞらえ、武士道と相撲道を重ね合わせるべきとする戦時期の国技相撲のありようとはまったく異なる「兵士と相撲」の関係が、ここからみえてくる。

戦場の兵士たちが大相撲の向こうにみるものは、本場所の星取り表の星の数だけではない。ラジオから聞こえる相撲中継の歓声に、「立派に相撲をやっている」母国の健在を思うこともあった。大相撲が「ある」ことは、日本とそこに住む家族や友人の安寧を想起させるものだったのである。

大相撲が兵士に想起させるのは、強国としての母国だけではなく、時として故郷そのものだったのではないか。そう思わせるエピソードを、1940年（昭和15）に華中地方の前線地域を慰問した横綱双葉山が残している。

武昌、咸寧に次で蒲圻に行きましたが、この附近の皇軍が占領した地区の中には大小・高低さまざまの山が多くありまして、それらの山は皇軍によってそれぞれ名がつけられており、中には双葉山、羽黒山などというのもあります。

私は、〇〇部隊長閣下から、「これが双葉山だ」といってその山の写真をいただいてまいりましたが、聊か恐縮せざるを得ませんでした⁵²⁾。

外地に開拓団として移住した日本人移民と同様に、前線兵士たちも駐屯地附近の山になじみの名前をつけていたのだろう。もとより力士のしこ名には、「山」や「川」など出身地の自然にちなんでつけられることが多い。異国の山を力士のしこ名で呼ぶとき、兵士たちが故郷の山河やそこに住む家族、相撲をとった幼少時の記憶を想起したとしても不思議ではない。相撲にはそうしたパトリオティズムとの親和性が確かにあるが、それは「国技」というナショナリズムには回収できない心情なのである。

【注】

- 1) 財団法人日本相撲協会博物館運営委員監修『近世日本相撲史』第2巻、ベースボール・マガジン社、1977年、2頁。
- 2) 先行研究には、戦時期の武道・スポーツと日本軍の関係性を考察したものとして、高嶋航『軍隊

- とスポーツの近代』青弓社、2015年、がある。また相撲の皇軍慰問の実態について整理したものとして、後藤康行「戦時下の大相撲と戦地への「皇軍慰問」」『専修史学』55号、2013年、がある。
- 3) 明治期に活躍した劇作家、栗島狭衣は自著のなかで次のように述べている。「洋酔主義のはびこった鹿鳴館時代に、相撲は野蛮の遺風だから、あしたの裸踊式のを洋人に見られるのが国辱であるという見解から、断然廃止せよという議論が、時の要路の頭官中に主唱された」。(栗島狭衣『相撲百話』1940年、朝日新聞社、252頁)
 - 4) 国技館の建設経緯については、胎中千鶴「植民地台湾の大相撲興行と「国技」相撲」松田利彦・陳延媛編『地域社会から見る帝国日本と植民地』思文閣出版、2013年、649-650頁を参照。
 - 5) この時期の大相撲の海外巡業については、武者成一『史談 土俵のうちそと』雲母書房、2002年、15-48頁、および胎中千鶴「帝国日本の相撲」『現代思想』第38巻第13号、青土社、2010年、186-188頁を参照。
 - 6) 加藤隆世『明治時代の大相撲』国民体力協会、1942年、465頁。もとより大相撲は、明治の藩閥政府の要人たちと浅からぬ関係がある。江戸期まで有力力士たちは、大名家の「抱え力士」として、武士と同等の生活と地位を保証されたため、藩への帰属意識も強かった。そのため明治維新後、藩の解体とともに路頭に迷った力士たちの生活を案じ、相撲廃止論に反対したのも、藩閥政府の西郷隆盛、伊藤博文、黒田清隆、後藤象二郎、板垣退助らであった。(加藤隆世前掲書、29-31頁)
 - 7) 加藤隆世前掲書、467-468頁。
 - 8) 式守伊之助「満洲先乗物語」『相撲』第1巻第3号、1936年、77頁。
 - 9) 加藤隆世前掲書、466頁。
 - 10) 鳴戸政治『大正時代の大相撲』国民体力協会、1940年、460-465頁、および彦山光三『相撲道総鑑』国民体力協会、1940年、429頁。
 - 11) 大日本相撲協会の設立経緯については、胎中「植民地台湾の大相撲興行と「国技」相撲」、652-654頁を参照。
 - 12) ただし、植民地台湾への小規模な興行は何度か実施されたほか、1927年(昭和2)には朝鮮巡業があり、京城放送局から、日本初のラジオ相撲中継放送がおこなわれた。(前掲『近世日本相撲史』第1巻、ベースボール・マガジン社、1975年、41頁)
 - 13) 資料上の制約があり、この時期の大陸巡業の全容は明らかではないが、笠置山勝一と第16代式守伊之助の記述によると、少なくとも笠置山は1933年(昭和8)に十両格で、35年(昭和10)には幕内として朝鮮・満洲に巡業で訪れている。また伊之助は32年(昭和7)にも渡満している。(笠置山勝一「鮮満巡業雑感」『相撲』第1巻第6号、および式守伊之助「満洲先乗物語」、78頁)
 - 14) 相馬基『相撲五十年』時事通信社、1955年、310頁。
 - 15) 同上、311頁。
 - 16) 前掲『近世日本相撲史』第2巻、89頁。
 - 17) 谷川浪之助「満洲国に於ける大相撲」『相撲』第2巻第9号、1937年、24頁。
 - 18) 戸田繁治「大連の玉錦、双葉山一行を観る」『相撲』第2巻第9号、25頁。
 - 19) 谷川浪之助「満洲国に於ける大相撲」、25頁。
 - 20) 1933年(昭和8)、協会は元関取の佐渡ヶ嶽高一郎が発案した「相撲基本体操」を公認し、一般人を対象とした広報活動を展開した。しかしもともとこの体操は、1929年に引退した佐渡ヶ嶽が、私財を投じて道場を建設し、指導と普及に努めてきたものであり、協会はそれを追認したにすぎない。佐渡ヶ嶽の体操考案やその後の活動については、根岸国治「本会のあゆみ」『すもう研修』復刊号、日本相撲研修会、1955年、44-49頁を参照。
 - 21) その一例を示す資料として、飯塚知信『中支皇軍慰問行』越後タイムス社、1940年、がある。飯塚は新潟県柏崎市高田村村長。
 - 22) 芸能団体の皇軍慰問に関する記録資料としては、新保チヨノ『皇軍慰問の旅』越後タイムス社、1941年、早坂隆『戦時演芸慰問団「わらわし隊」の記録』中央公論新社、2008年、などがある。
 - 23) 宋安寧「兵庫教育会による「皇軍慰問支那満鮮旅行」に関する研究」『神戸大学大学院人間発

- 達環境学研究科研究紀要』2巻1号、67-79頁、2008年。
- 24) 飯島知信および新保チヨ前掲書。
 - 25) 藤島秀光『近代力士生活物語』（復刻版）（『大相撲鑑識大系7』所収）、本の友社、2001年、278頁、および和久田三郎『相撲風雲録』池田書店、1955年、238-239頁。
 - 26) 和久田三郎『相撲一路』国防武道協会、1943年、160頁。
 - 27) 同上、161頁。
 - 28) 藤島秀光「大相撲界の近状」『相撲』第5巻第8号、1940年、3頁。
 - 29) 「編集後記」『相撲と野球』第33巻第21号、1943年、116頁。
 - 30) 鳴戸政治「男女の川一行より」『相撲』第3巻第10号、1938年、16頁。
 - 31) 木村庄三郎「奥満の皇軍慰問相撲」『相撲』第2巻第9号、1937年、26頁。
 - 32) 笠原十九司『日本軍の治安戦-日中戦争の実相』岩波書店、2010年、52-53頁。
 - 33) 大山渉「北満方面第一班より」『相撲』第5巻第10号、1940年、14頁。
 - 34) 同上、14頁。
 - 35) 双葉山（時津風定次）『横綱の品格』ベースボール・マガジン社、2008年、152-154頁。
 - 36) 田子ノ浦忠雄『土俵の砂が知っている』一水社、1965年、81-83頁。
 - 37) 佐藤観次郎「陣中相撲だより」『相撲』第4巻第11号、1939年、12-16頁。
 - 38) 「皇軍慰問と大相撲 座談会」『日の出』第13巻第1号、1944年、69頁。
 - 39) 前掲『土俵の砂が知っている』、69-70頁。
 - 40) 名寄岩静男「皇軍慰問の旅」『野球界』第31巻第1号、1941年、107頁。
 - 41) 「編集後記」『野球界』第32巻第5号、1942年、168頁。
 - 42) 『朝日新聞外地版（台湾版・1941年）』4月2日の紙面、ゆまに書房、2009年。
 - 43) 同上『朝日新聞外地版（台湾版・1941年）』4月20日の紙面。
 - 44) 大久保澄夫「南支慰問力士団の苦闘」『野球界』第31巻第14号、1941年、61-63頁。
 - 45) 同上。
 - 46) 近藤良信編『撃つ体育人』体育出版社、1943年、91頁。
 - 47) 太平洋戦争開始以降、外来スポーツが批判の対象となるなかで、唯一大相撲だけがNHKのラジオ放送を許可されていた。しかし42年春場所以降、実況中継は日曜日の初日、八日目、千秋楽の3日間だけとなった。他の日の取組みは15分間に編集され、午後6時放送の「少国民の新聞」のあとに放送された。（坂上康博『スポーツと政治』山川出版社、2001年、78頁）
 - 48) 斎藤良輔「前線で聴いた相撲放送」『相撲と野球』第33巻第1号、1943年、17頁。
 - 49) 前掲『撃つ体育人』、46頁。
 - 50) 前掲「皇軍慰問と大相撲 座談会」、68頁。
 - 51) 高橋秀実『おすもうさん』草思社、2010年、170頁。
 - 52) 双葉山定次「痛感したこと」『相撲』第5巻第11号、1940年、20頁。

（平成27年11月2日受理）